正月外科小備　宮川春暉撰

外科総論　瘡瘍治療ノ八綱其主腫ノ症論篇ヲ南書録紅毛話ヲ別ル

春暉ハ伊勢人稽古館医学所ノ教授ニシテ四方ヲ遊歴シテ五年間ニ東西辺記五篇ヲ著ス所謂京都ノ名医ヲ訪ヒ

等法學海　坂新藏著

新藏名正水大坂人麻田附立ノ高弟ナリ又諸南遊歴ノ者ヲ以テ

高橋作左衛門　通称ヲ　間五郎兵衛　立号ヲ　足立左内　信階ヲ　山片小右衛門　姓称ヲ　皆麻田ノ門人也

高橋足立共ニ大坂豪北組同心ナリ間ハ十一屋ト称シテ大坂豪商ナリ山片ハ天満豪商ナリ

高橋間両氏ハ麻田入門ニ天明寛政両度ニ亦ル地ニ出ル事ヲ以テ天明寛政ノ

八月和蘭譯筌　前野良澤撰　本編本編附録改文事法

自序　天祿文り為文者ハ本書ノ義理ヲ考レバ則其正ヲ得ルヿ能ハズ故ニ譯者コレヲ譯ス接意明瞭ニ註釋言語ニ文意情勢セシムヿヲ第一ニ為ス故ニ其書ノ情ヲ知ルヿ能ハズ而シテ文意情勢ヲ知ルヿ能ハザレバ何ヲ以テ其書ノ義理ヲ考ヘ得ンヤ　蓋シ文字ハ人ノ口ニ出ル言語ヲ目ニ見ルヿ能ハザルモノニ因テ字ヲ以テ

正月著書天覽の報を受て林子平私に祝宴を設く

子平より盟盟社人蘆塘氏北信中上復小子著述之三國通覽圖說既成方より大覽を別信中上復小子著述之三國通覽圖說既成方より大覽を後信有之旨申越候ゆえ一部上納仕度段奥書林村田治兵衛へ申聞候処一部上納仕度段奥書林村田治兵衛へ申聞候処一部上納仕度段奥書林村田治兵衛へ申聞候処

幕府天文方山路才助、名他風、主住號七曜暦を作成呈進

天文方代々記山路才助、有徳公第十参聚以来代々四百の西洋暦法を研究し泰祖父の遺志を継ぎ精しく上請し五ヶ年後七曜暦を作りて呈進す是年十二月所後異なりて白鳥三枝有敬

十一月阿蘭陀大通詞本木仁大夫を命ずるに天球地球用法記を和解せしひ　全篇七巻三百三十五章外附録一巻

原書勤る、星所本原大陽暦理了解勤到天地二球用法記首巻は五星日月の部なり明年三月向完成て呈進す通詞文書奉命拝書時期報答自流今氷解素既諸子訳神腐稿今樵以斯致其即吉分而已と所自苦之劇回目光世以譯司食公二巻以下は十九ヶ月を要て完成す五年要五九月より本書上る三山和解仕度と義訳新訳二本あり其間十八年を距つ原書は新訳百年後の相違多り知之前書は一私撰後書は官撰書なり後書は百年後の相違多り知之前書は一私撰後書は官撰書なり後書は百年後の相違多り知之前書は一私撰後書は官撰書なり後書は

九月家齊將軍二書國返付の漂民磯吉幸太夫を江戸城内吹上苑に召し親しく彼國の風俗情況を聞く

齊年年表　寛政五年癸丑　幕府より朝鮮へ通信使の聘礼を命ず　九月朝鮮より天明二年難船漂着の日本人を送還す　同月将軍家斉初めて吹上苑に出る　十月将軍家斉中納言に任ず　十二月将軍家斉初めて大学に臨む　同月将軍家斉初めて上野に行く　同月将軍家斉初めて日光に参詣す　同月将軍家斉初めて大学に臨む　同月将軍家斉初めて上野に行く　同月将軍家斉初めて日光に参詣す

十月和泉人岩橋善兵衛に望遠鏡を自製し勢て京都に上り諸里を観象して国と作す　宮崎孝之輔　岩橋善兵衛　和泉貝塚の人岩橋善兵衛新製望遠鏡を製す　岡田次郎　形八枚筒長八九尺　天文学者　所司代　蘭学者　所司代　天文学者　所司代　蘭学者　所司代　天文学者　所司代　蘭学者　所司代

寛暦錦暦四十餘年天歩暦本又三刻の差あり困て改暦の議起り麻田剛立を召し其任を當らしめんとす剛立固辞門人高橋作左衛門晩聞五郎兵衛二人を推挙代之

京都人辻章後曾て和蘭語を學び其言語を翻訳せんと十月起稿蘭語八葉是也

近藤重蔵　長崎奉行所居吏と為る

古川良祐編言　我が學水先生嘗て蘭學階梯を家塾に刻し仕中ノ業生に入學の大法を示す後作語を言習し書籍へ就き業生に問疑其要領を得て一小冊とす蘭學佩觴と名つく

稲村三伯此頃蘭學當初より思へらく彼我對譯の語異なくんば和蘭學を普及せいつ能はじと蘭人ハルマ所撰蘭佛對譯字書を採り其佛語を去り蘭語を加へんと刻苦數年是年稿成刊行想して波留麻和解と云ふ十三巻

十一月石川大浪五百阿羅漢寺所藏和蘭畫模寫

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

下絵人伊能勘由　江戸ニ於テ金星南中ヲ白晝測量

長崎通詞吉雄幸作楠林重兵衛西吉兵衛番蘭書和解掛ヲ命ゼラレ又少年譯司の職業ヲ行はしむ

十一月寛政新暦頒行　南夜北晝法ヲ改ム四十五年

森島中良・白河侯の祿仕を辞し桂川甫賢ト改稱

字田川玄隨北洞子なし親族芳桂川大槻諸氏と合議し安岡玄真を稲村三伯の養子として其家を継しむ

稲村三伯の養子として字田川榕菴是なり

二月施藥院三雲壌善於京都罪囚解屍の挙あり小石元俊大坂より其場に参列し解體図説を作る

施藥院　天正中創置　世醫其官職医師

三月和蘭甲必丹例参桂川大槻杉田諸氏客館對談如例

解剖ヲ見聞初ノ例　寛政元年ノ例ニ倣フ

西本願寺門主文如病む江馬元齢一診治之

文如ハ本願寺第十八世

本多利明著書の時の猜疑を觸れ八事を省み路を北陸に晦す

經世秘策後篇ハ君道深秘の密策ト雖ども世人の疑謗を恐れ本定佳既に脱稿せり常時の悪評を恐れ出版を遠慮せり

十二月仙臺ニ於テ藩医木村壽禎ニ安定刑屍ヲ解剖シ歐文の供養塔ヲ建つ　仙臺藩臓此挙為始

青木昆陽冠米長崎ニ就テ蘭学医学を修ム　天然石碑高一尺五寸許上ニ供養二字其下ニ殿ヲ梅文ニ如ト埋没七十餘年廢滅不可読左側ニ寛政十年十二月十九日ト十字

三月蘭呪摘芳　大槻玄澤譯　刊本二冊（上出）

自然哲學　民間常識ニ為ス問答ノ体ニ倣フ　博物図説　天産物品方法　百科図説　文書之題目　博物新編　請西洋人質問書所有　蘭学者未考　而門生録　結髪為新十篇　和蘭田園略説

重訂解體新書・大槻玄澤增譯　原本ニ十冊ニ訳ス

本書ハ二十五年前杉田玄白所訳出ス後十年数稿三回修文ヲ重ネ○大槻氏ハ杉田先生ノ門人ニシテ杉田先生ノ命ニ依リ新訳ヲ一人ニ任ス

五月八圓儀　志筑忠雄譯

オランダ刊行ノ原書ニ拠ル　オランダ人ハ西洋ノ人ト名ツク　ヨ

十月魏紅毛語譯　桂川甫賢撰

和蘭ノ商館ヲ設ケ商人ヲ置ク○北書復ヲ改ム　改訳ヲ改ム　改訳ヲ改ム

七月西域物語　十月經世秘策後篇　本多利明著

西域ハ西洋即歐羅巴洲ト稱シ其附言ハ西域ノ事ヲ育ノ法ニ記シタル書ニシテ

六月暦象新書上編　志筑忠雄譯

原書ハ英國人ノ著ス　二十年ノ歳月ヲ費ス　大意ハ前人ノ未発ノ新説ヲ述ベ

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

正月西村太冲に加賀藩より聘せられ天文學講義を辨す

三月小野蘭山に召れて江戸に來り本草學を醫學館に講ず

五月麻田剛立死

閏二月伊能勘解由に蝦夷の命を奉じて蝦夷地東海岸を測量す此時幕府小吏間宮林蔵も蝦夷に在て伊能と會合す

八月長崎大通詞吉雄作兵衛蘭學を興し吉雄流と稱す

吉雄元吉業を京都に立て其學塾を施義堂と云

十月曆家新書中篇　志筑忠雄撰

蘭譯答問　吉雄元吉撰

遠西軍器考　石井庄助主命にて記述せしもの

西洋畫談　司馬江漢撰

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

伊能勘解由の沿海實測を四月本島東海岸を測了す於是て地度一度の里程を定む明年圖成す遠

此測量するに始て一度の里程を二十八里二分と定む後二年和蘭人ヲランデ書に本所蘭一度里程を二十八里と其合せり○伊能所用の尺を伊能尺と四郎尺とに其中を採り新尺を作て用ゐたり

志筑忠雄斷自力の發明もて蘭文を語格詞品ある事を覺り

記之翻譯の用を儒小と云ふ

其書を和蘭四方考りふ

長崎人末次忠助先是志筑柳圃に就き星象等教を學ぶ

奥州人永田善吉此年江戸に出て西洋畫を司馬江漢に學ぶ

小石元俊出先是京都に徳川家塾究理堂を建つ

平天儀圖解

和蘭詞品考

志筑忠雄撰

岩橋耕郊堂撰

西洋離記

山村才助撰

二月和蘭甲必丹例参桂川大機宇田川諸氏客館對話

四月稲村三伯死有故業務遊身下絶姓名を海上隨鷗と換小

八月間重富重新父子日月食觀測のため長崎に至る

星學家なる末次忠助を問い設義解然たりとぞ

九月杉田玄白前野良沢寄

伊能勘解由の沿海實測を六月より十月に至り日本海岸の北部測了

六月夢之代　山片蟠桃著

十月暦家新書下篇　志筑忠雄譯

増譯未電異言　山村才助撰

天文圖略說　杉田玄白著

形影夜話

天文生理水間經說

薩摩藩出版

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

五月和蘭館書記ヘンデレイキドーフマ甲必丹と為る

風時此例も事物一世の大礼ヨリ廃止す故に長崎駐在の文人通詞は復一度も通じ難し

七月蘭譯ラランダ暦書を大文方へ下付調査せしむ

仙臺藩士大槻民治稿

崎る至日来次忠助勅して教を中野柳圃に受けし柳圃即

志筑忠雄星年本姓中野を復す

星自記

同玄幹

遊撃して九月長

暦書管見　高橋至時譜著　原本十一冊現存八冊

蘭訳暦書は寛政七年頃より東岡の南學者の間に流行し其文字を若干知る者多し

日蝕續算　中野柳圃譯

大意地球月を犯して食する日蝕は月の影地を掩て食する月蝕なり

文化

正月天文方高橋作左衛門北四月子作助襲職亦稱作左衛門

長崎通詞吉雄六次郎馬場千之助西吉右衛門等中野柳圃を

就き和蘭文科の學を受く自是西洋文法諳格始て行る

六次郎後雅之助永保号和蘭十之助号由弓教里

○吉雄権之助高橋作左衛門号六斗

蘭人ヒルデブランド氏の学問を受て大槻玄沢等と共に蘭学の

先生ノ門ニ入ル玄沢ノ門人ハ二十年許リ前ニ大槻玄沢ノ門人ニ

入ル玄沢ノ門人ハ二十年許リ前ニ吉雄権之助ノ門人ニ入ル

○吉雄権之助ハ大槻玄沢ノ先生ノ先生ノ門人ニ入ル

○蘭人ヒルデブランド氏ハ和蘭ノ学問ニ通ジ和蘭ノ文法ヲ

明ニシ和蘭ノ文法ヲ明ニシ和蘭ノ文法ヲ明ニシ

三月幕府目付遠山金四郎景晋を長崎に遣り蘭國使を信牌共
期に後れ諸求の許す能はずと告げ使を去る
魯國書を自國文日本文滿洲文の三通なり書文も甲必丹
[illegible]
六年者若請改し滿文を除き蘭文を加へ[illegible]
宇田川玄真譯述
作つて其學を採て提綱三卷を刊行す而後蘭方醫學生皆
北書を以て入學第一の請本とす　西洋醫學の發達す
宇田川玄真は名は榛齋と稱し[illegible]
六月杉田玄白は醫術精練を以て將軍特召謁見を賜小藩侯
因て格を進め祿を加ふ　蘭方醫[illegible]
海上隨鷁七下筆より京都に遊り和蘭醫學を以て門を建つ
（小藩侯淀藩井忠實）
從學甚多し京坂に洋學是より起る
野崎藤雄　隨鷁居士　[illegible]
紀州醫人華岡隨賢始て麻醉劑を用ひ乳癌を開切す
隨賢名震亨青洲[illegible]
○藤[illegible]
○[illegible]

二月醫範提綱　宇田川玄真撰
[illegible]
松山藩醫青地林宗一所學を棄て才世祿を棄て去る
[illegible]
俄羅斯亞雜話　武田孟文著　長崎人芳蛾春山抵
[illegible]
和蘭醫談　伏屋素狄口授　地通富筆錄
[illegible]
六月蘭療方藥解　廣川龍淵撰
十月和蘭通舶　司馬江漢撰
瘍科增言　華岡隨賢口授
[illegible]

三月和蘭甲必丹通商江戸例參
[illegible]
四月司馬江漢遺隱書畫會
[illegible]
御醫從來法印法眼等階官を例とす荻野元凱は典藥大允を
[illegible]
正月二國會盟錄　中野柳圃口譯　安部龍平筆記
[illegible]
丸月魯人來り北海擇捉島を掠奪して去り明年亦再寇す
[illegible]
伊能勘解由り沿海實測を去年より今年にかけ中國西邊を
測量して十一月江戸に帰る於是本島全部全く了る
[illegible]
四月北邊探事　大槻玄澤撰
[illegible]
魯西亞國志　山村才助譯述
[illegible]

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

仙臺會津二藩ニ命ジテ兵ヲ北地ニ出サシム　六月堀田
少老[illegible]ヲ遣リ北海ヲ巡視セシム大槻玄幹隨行十月帰府
七月長崎通詞名村多吉郎馬場為八郎ヲ江戸ニ召シ蕃國事
件ヲ調査セシム　明年為八郎ヲ松前ニ遣リ書翰ヲ魯酋ニ授セシム
土浦藩士山村才助ハ奉命譯書ノ功ヲ以テ幕府ノ直臣ニ擧
ケラレ人ヲシテ會稽ニ比ス時人惜之
才助ハ蝦夷言語ニ通ジ力ヲ盡シ馬國ノ地略風俗ノ精通
シ以テ幕府ノ命ニ應ジ而シテ北人和ヲ以テ之ヲ見ル能ハズ文才ヲ以テ見ル能ハズ
故ニ人和ヲ以テ大機ノ

二月長崎通詞六人を撰い和蘭館更へトルを就き英吉利語を學ばしむ其後新に醫學世話役を置く

本木右左衛門　馬場為八郎　名塚猪之助
本木昌左衛門　古川六次郎　馬場佐十郎

四月関五郎兵衛ラランデ暦書取調御用濟て大坂を帰る

足立左内と暦作御用として江戸天文臺に召さる

七月天文方渋川善助家を承け又助左衛門と改稱す山路弥左衛門し父の職を襲ぎ天文方となる　明年四月也

弥左衛門景祐　高橋左衛門景保の男にて渋川春海の末裔なり暦を天文方に開設せり其後代々世襲す渋川氏は暦を主とす故に暦の事は渋川に問ふべし　渋川中興と稱せらる渋川中興とは暦学を修め三左衛門同時相並び皆俊秀の士なり

藤林泰助　蘭學を京都に立つ同時小森玄良　赤間素

藤林泰助は紅毛書を見て蘭学を起す　小森玄良は入京を聞き蘭学を起す　赤間素は紅毛書を見て蘭学を起す

京都醫人小石元瑞　承家開塾究理堂學規を揭く

野作雜記　馬場佐十郎譯

原書の書西洋人の手記なり○野作の搬表の漢数字

海上隨鷗訳述

八譯六十四冊

鉄石或問採要　関五郎兵衛撰

七月日本輿地圖　高橋作左衛門撰

六月蝦界全圖　高橋作左衛門撰

和蘭甲必丹ドーフ江戸例参大槻父子

客館を諸學校教導江戸化教伴問答

安藤醫人土生玄碩一眼鏡を以て幕府侍醫を拜ける

出羽人小関三英が世界地誌を度量自勢國家等の區別を新説を述ぶ

江戸人市野金助定和蘭尺度

藤林泰助撰

和蘭小通詞西吉右衛門以病辭職子吉太郎嗣

伊能勘解由の沿海測量を先是四國島を畢り是年九州島を入り豊前より東海岸を量定して薩摩肥後を至る

蘭語譯選　馬場佐十郎撰

萬國全圖　高橋作左衛門製

量地傳習錄　伊能勘解由口授門人遠藤愛助記述

占筮箭譯說　馬場佐十郎譯述

整骨新書　各務文献撰

長崎大学附属図書館経済学部分館　武藤文庫所蔵

正月馬場佐十郎上書西亜書牘和解

海上隨鴎北

伸亭寛山　東都大惣
紅亭　中林春長　門人連名二十二人
西谷[illegible]　中村[illegible]　常望東[illegible]
[illegible]　[illegible]　市[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　

正月馬場佐十郎足立左内を松前に遣り書人元老伊を就き
魯西亜語を學ぶ

二月天文甚失火官舎一切焼亡　無幾再建
大槻玄沢・桂田少老の内許して翻譯局を別立さんと謀
りしも此度災の時なるに付き其事を暫く右の
四月宇田川玄真・稲村貴　天文暦譯員を為る明年将軍賜謁
五月魯船又松前に来り前年侵掠も國主の指圖にあらずと
訴の証明し困て元老伊以下を送るべき事を乞小幕府其
情を認め許之九月魯船帰帆す馬場足立二人侍府十二月
更に帝エリて二人を魯西亜辯書取調御用掛と す

十月丹後人新宮涼庭ニ長崎に遊學す
清国名勝図山人年二十一内科医学と記す和蘭医術
の明晰なる感じ江戸に出て宇田川の門に入る数年而
て此門に其面目を立て本次間其学を学ぶと見る

野呂天然　大京都に於て生象説を唱ふ　生象説解剖学也
大槻江戸人名長崎空学思重通精強少時暮れ難き為つ志
遂を得ず年三十に退業す身を誘引て人と共外方書に通じ紅毛西洋
風に心酔し其学を為す人と共に野に居り其後に京に出て
生象説を唱ふ　其説の所由を知る人一度は
生象説を起す電気利学を蓄積し学説を説く
学を起す　其説に二法を新説に新説人身の
説を起す　其説に二法を新説に新説人身の
説を起す　其説に二法を新説に新説人身の
説を起す　其説に二法を新説に新説人身の

吉雄章載　長崎人初稿諸熙安次郎伯父耕牛を就き吉雄流
醫術を修め復任闇業是年歿す
長崎の吉雄氏は和蘭訳司を世職とす
藤三郎　次郎　次郎　次郎　次郎　次郎　次郎　次郎

蘭語
和蘭名方　宇田川玄真譯　門人信陽木村秀茂輯
杉田立卿　自出内科医学世医和蘭薬品西洋治療之概略
未詳者　種痘家　御医　以為遺憾　今稽考已及数十部而至其製練諸附
未詳者　勝多家　以為遺憾　今稽考已及数十部而至其製練諸附
之者曰　和蘭名方　夫者此書自筆稽木皮金石土鹽之類後
之宜　或湯　或方　夫者此書自筆稽木皮金石土鹽之類後
説方百　経千　検覧無　不審　薬書此書以来拓隆製法薬品
薬　未　之者所　数薬品一百三十二種

陸海戰圖解　辻章俊蘭譯
原国に西魯一千六百二十九年刊行の字田川の譯
蘭国の書の皆羅甸文字を以て記す国々大意ノ義故スと此
人又書西亜文字なるも手を染めたり

生象止観　野呂天然　雄撰　解剖書也
緒言曰　紅毛所譯　御世　何者社書人寄家　稿而刊人　発見島
敷長　奥観其　記象以　想生象　之解也　精来子所譯人　長　見生象
也社　至記象之　国況　思其生　成解剖　剖　當譯之生象也

遺花秘訣　馬場佐十郎譯　魯西亜本草書　長崎原序刊行
文化戊寅　杜府人中川五郎治なる者譯撰　島
神農　なる　治療　土　後　位ヤ　なる　い　間　原　地　所　の種　毎　地　所　な
見て　蔵　物　つ　も　此　所　て　異　草　手　な　り　其
故　得　雷　す　後　色　の　て　体　国　す　南　時　機　未　之　所　の　言　り　り

九八

二月天文方高橋作左衛門ニ書物奉行を兼帯す
是月和蘭甲必丹江戸例参大槻字田川諸氏依例對話
大槻玄沢字子冬　字田川玄真字子真　大槻磐里の蘭学凡を近省紀崎人羽宗泮斯トイヘル人都
下に来り　一日右利ルフ　技ず　宗　人　羽宗泮斯　(有恥不信言然)　余ノ
後地　出テ　相　見　吉　林　加　測　ノ　性　其　(有恥不信言然)　余ノ
日ヲ　公　ト　ル　ト　ル　ト　ル